

「ピアノが本当に好きなんやね、音聞いた  
だけでわかるよ。これは演奏を終えた私に先  
生がかけたくださ、に言葉。ピアノを弾くこ  
とが純粋に楽しか、たあの頃の音を、今ほも  
う出すことはできない。将来に不安を抱えた  
今の私が生み出す音。それは、とどこか暗  
くて弱い音。人の心は全て音色に出てくるの  
だ。ナチスによるユダヤ人迫害の時代を生き  
抜いた少女ハンナ。彼女が奏でる音はどんな  
音だ、たのびらうか。

一九三三年、ヒトラー政権が誕生した。そ  
れが地獄の始まりだ、た。反ユダヤ政策によ  
ってハンナの住む平和な町は一変した。皆殺  
しに遭、た家は救えきれず、無造作に置かれ  
たままの死体は異臭を放、た。ハンナの一家  
はウ、イオリンの先生でもあ、たドイツ人音  
楽家、クラウス夫妻に匿われ、その家の地下  
室で生活を送る。恋もなく、地上の光を浴び  
ることさえできない生活の中で、ハンナは平  
凡な日々を願いなから、ウ、イオリンに打ち込

んだ。だが、その願いも虚しく、ゲシニータ  
 に発見され、アウシユヴィンソ強制収容所の  
 門をくぐることになる。

収容所での生活はまさに死への道だった。  
 働くことのできない病人、子ども、お年寄り  
 はガス室へと送られて灰色の煙となった。元  
 氣だった者たちも過酷な労働と栄養失調で次  
 第に弱り、虫けらのように殺された。その殺  
 し方は残忍を極め、銃では味気ないからとい  
 って水さし鉄の棒で殴り、絶命させる親衛

隊員もいた。しかし、収容所の中で生きる切  
 符を手にする者もいた。それが音楽隊だ。ヴ  
 ァイオリンを背負っていたハントは音楽隊に  
 スカウトされ、特別な待遇を受けることとな  
 ったのに。血も涙もなく、人を殺すことを楽  
 しむかのような化け物たちも涙を流すことが  
 あった。それはハンナが奏するヴァグエ、マ  
 リアの青色に触れた時だった。その青色は  
 人の出会うさまたまな感情を限りなく浄化さ  
 せるように澄んでいた。化け物たちも音楽の

前では普通の人間だ。た。彼らは自分たちの  
 中に残っている人間性に取りすがらため、音  
 楽をむさぼるように欲しがっていたのだ。私  
 はハンナと彼らの間に共通した悲しみを感じ  
 た。その悲しみとは何だ。たのたうか。  
 ハンナは音楽隊として、収容所で殺されて  
 いく人たちの悲鳴を掻き消し、恐ろしい行為  
 を隠蔽するためだけに演奏させられた。火葬  
 場の近くでは裸の死者を嘲るような軽快な音  
 楽を奏で、死を悼む鎮魂曲を奏下ることは許  
 されない。音楽は人々を欺くための道具に成  
 り下がっていた。生きるためには現実と向き  
 合ふしかない。ハンナは演奏を止めることも、  
 閉こえてくる悲鳴に耳を塞ぐこともできな  
 った。何も考えず、機械的に作業をこなす。  
 それがうまく生きるコツなのだ。自分に言  
 いかせて。それは組織に組み込まれた親衛隊  
 も同じであつた。機械的に生きる彼らの中に  
 はんの少し残された人間性が、自分たちの罪  
 を浄化するためにハンナの奏でる「アヴェ」

マリア」を求めたのだろう。その音色は罪の  
 意識に苛まれる悲しみを持つもの全てと、ほ  
 んのひと時地獄から解放したのだ。  
 ハンナの音楽が完全に人々を欺くための道  
 具とならなかつたのは、クラウスの存在があ  
 ったからだった。クラウスはドイツ人であり  
 ながらハンナと匿い、連行される時には自分  
 も収容所行きと志願した。彼の勇気の元とな  
 ったのは日本の板東倅虜収容所での体験だ。  
 た。その所長の松江は倅虜たちを人道的に  
 扱い、ドイツと日本の文化交流を図った。チ  
 エロ奏者のクラウスにオーケストラを作らせ、  
 日本の子どもたちのために音楽教室を開かせ  
 た。かつてはソリストになるために人を蹴落  
 とし、音楽と出世の道具としか考えていなか  
 ったクラウスだが、音楽が民族や国境を越え  
 た究極言語であることをそこで知った。戦争  
 の勝者と敗者、支配する者とされる者とか心  
 を通わせるその場所はまさに楽園だった。上  
 に立つ者の心一つで本来地獄であるはずの収

容所が樂園になることを守るたウラウスは、  
 ハンナたち音楽隊に人の力の偉大さと自分た  
 ちの使命を教えた。人の心の交流によつて生  
 まれる文化。人を機械化し、利益をあげよう  
 とする文明。ヒトラーが創造しようとしたの  
 が文明ではなく文化であつた。アウシュ  
 ヴイツの地には樂園が広がつていた。だろ  
 う。今も世界中に民族紛争やテロが存在して  
 いる。板東の奇跡が示すように、それらの問  
 題も人の力で解決できるはずだ。戦争はな  
 くなり

ないという人がいる。しかし、人の持つ力は  
 それを覆すと私は信じる。今の私にはハンナ  
 が教えてくれた大きな勇気があるのだから。  
 すっかり埃のたまつたピアノを、急に開け  
 てみたくなつた。この本を読み終えた。私はい  
 ま、どんな音を奏でられるにらうか、きくと  
 その音は弱くて、暗い音なんかじゃない。と  
 こかで誰かが涙を流していても、その音と耳  
 にすれば心と顔とあけなくなるよ。なま、  
 すぐで強く響く音。それが私の音、

(1996)